

現代のことば

やまだ 山田 奨治 しょうじ



身近なお気に入りの風景が、ある日突然姿を消してしまったり、誰だっけ悲しい。それが日本人のとりわけ好きな桜並木ならば、なおさらのことだ。

わたしが住んでいる街を阪急京都線が走っている。いまから十年ほどまえのことだったろうか、線路沿いの歩道に数百メートルわたって桜の幼木が植えられた。最初の春は、可愛らしい花をちらほらと付けただけだった。年を経るにつれて、桜の木

々は少しずつ大きくなり、二、三年まえにはじゅうぶん花を樂しめるほどに成長した。春が過ぎると新しい梢に淡い緑が広がり、夏には灼熱の歩道に木陰を落とし、秋になるとそれはあざやかに色づいて、最後の一枚の葉が落ちるまで、道行くわたしの目を樂ませてくれた。

やがては道路向かいの自衛隊の桜とともに、お花見の名所になるのではと楽しみにしていたのに、八月はじめにその桜並木

桜が消える街

がきれいになくなってしまった。阪急線の立体交差化の工事にともない、一時的に道路を付け替えるために、街路樹が取り払われたのだ。

工事のために道路が変更になることも知っていたし、桜がなくなることも、なんとなく予想はしていた。しかし、更地になった歩道脇を見ると、なんと切ない思いがこみ上げてくる。たしかに桂駅から洛西口駅のあいだの踏切では、渋滞が多くなってきた。線路の立体交差化はひとつの解決策だろう。しかしそれが唯一の策でもなからう。渋滞の原因は、遮断機の昇降と前後の信号機がまったく連動していないせいではないか。踏切を毎日のように通っている

と、そう思えてならない。遮断機が上がっても、直前直後の信号が赤であるため、車が先へ進めないことが多いのだ。踏切と信号をつないでうまく制御したら、渋滞は少なくなるはずだ。踏切での一時停止という、諸外国にほとんど例のない義務をなくせばより効果的だ。景観を壊すような工事を、あえて行う必要はあったのだろうか、消えた桜並木をみて、いまさらのように思う。

桜は「伐採」ではなく「移植」だということが、せめてもの救いだ。だが、無惨に枝が落とされ、根を切られてどこかへ運ばれていく様子を見てみると、そんなことを炎天下でやってよいのかと素人には思える。工事の

ひとも汗だくだが、桜にとってもつらい夏だ。

工事が終われば、また桜が戻ってくると思い。だが、並木が元の姿を取り戻すまでには、十年以上はかかるだろう。そんなことを書いていたら、

こんどは新山陰街道沿いの、樹齢数十年はあろうかという桜並木が、半分ほど消えているのをみつけてしまった。こちらは「移植」ではなく「伐採」されていた。別の町内のことなので理由はわからないのだが、道路と用水路の整備に伴う工事のようだ。効率と利便性を追いかければ、歳月を重ねた身近な美を、あっさり切り捨てる社会では息苦しい。(国際日本文化研究センター准教授・情報学)